

観覧日： 年 月 日 学校 年 氏名：

もくじきぶつ
木喰仏をじっくりみよう

もくじきごぎょう 木喰五行作の木喰仏「弘法大師像」をスケッチしましょう

もくじきごぎょう ここく
木喰五行は、五穀と塩を口にせず、火を使った調理をしないで木や草の実を食べ、人々に仏像や書を授けながら旅をするという修行をしました。

1718年に身延町丸畑で生まれた五行は、56歳の時に全国をまわろうと決心し、83歳のときによく日本全国を回りきり、ふるさとに帰ってきました。



木喰仏を見た感想を書いておきましょう

観覧日： 年 月 日 学校 年 氏名：

もくじきぶつ
木喰仏をじっくりみよう

もくじきごぎょう 木喰五行作の木喰仏「弘法大師像」をスケッチしましょう

もくじきごぎょう ごこく
木喰五行は、五穀と塩を口にせず、火を使った調理をしないで木や草の実を食べ、人々に仏像や書を授けながら旅をするという修行をしました。

1718年に身延町丸畑で生まれた五行は、56歳の時に全国をまわろうと決心し、83歳のときようやく日本全国を回りきり、ふるさとに帰ってきました。



木喰仏を見た感想を書いておきましょう

自由記述

ここにこしていて、やさしそう。全体的に丸みをおびている。両手に持っているものはなんだろう・・・など。



「地藏菩薩像」日本民藝館

木喰仏との出会いを記した文章にも登場する浅川巧によって、柳宗悦は既に李朝時代の朝鮮の無名の職人たちの作った日用雑器の「美」について目を開かされていました。そして後の「民芸運動」を考える時に大きな転機となったのが、大正13年正月の木喰仏との出会いだっただのです。柳はそれからほぼ3年間をかけて全国を回って木喰五行という、民間にあって修行の旅をして各地をまわりながら仏像を作りつづけた人物の跡をたどりましました。また、その中で出会った様々な工芸品の美から民芸運動の発想を得ました。



柳宗悦(1889～1961)

「民芸品」とはどのようなものかについては柳宗悦は『工芸の道』(1928)の中で次のようにまとめています。

- ・工芸の美は健康の美である
- ・用の美が結ばれるものが工芸である
- ・器に見られる美は無心の美である
- ・工芸の美は伝統の美である。

「民芸品」と呼ばれる各地の物産をリストアップしてみましょう。



あなたの身の回りにある「民芸品」や各地の「民芸品」について調べてみましょう。(…生活の中で使われている伝統に根ざした様々な道具、使いよく用いられることで形が洗練され、美しさが宿るようになったもの。それが民芸品です)

【参考】

- ・木喰仏については下部町丸畑の「木喰の里微笑館」では更に多くの資料を見ることが出来ます。
- ・柳宗悦については日本民芸館のホームページで詳しく調べることが出来ます。
ホームページのアドレスは、(<http://www.mingeikan.or.jp/home.html>)です。
- ・浅川巧についての資料館が北杜高根町生涯学習センター内に開設されていて、ここでは巧の兄の伯教についての資料も閲覧することが出来ます。
浅川巧については、江宮隆之『白磁の人』(中央公論文庫)が出ています。

観覧日：かんらんび 年 月 日 学校 年 氏名：

もくじきぶつ

木喰仏と民芸運動の出会い

それは去年の正月九日のことでした。私は思いついたまま甲州への旅に出ました。一つは小宮山清三氏の所に朝鮮の陶磁器を見に行くためでした。一つは八ヶ岳や駒ヶ岳の冬の自然が見たく日野春あたりを散策したいのが望みでした。また甲州で郷土的作品を購いたいと欲していたのですこの旅に私を誘ってくれたのは私の畏友浅川巧君でした。小宮山氏とは初対面でした。しかるにその日偶然にも二体の上人の作が私の目に映ったのです。・・・二体の仏像は暗い庫(くら)の前に置かれてありました。(それは地藏菩薩と無量寿如来とでした)・・・私は即座に心を奪われました。その口元に漂う微笑は私を限りなく惹きつけました。尋常な作者ではない。異質な宗教的な体験がなくば、かかるものは刻みえない 私の直覚はそう断定せざるを得ませんでした。・・・その折私は始めて小宮山氏から「木喰上人」という名を聞かされました。そうして峡南の人だということが付け加えられました。思いがけない私の驚きに対して、小宮山氏も心を惹かれたと見えます。一体をお贈りしましょうと申し出られました。私はこの好誼(こうぎ)をどれだけ嬉しく感じましたことか。越えて十六日「地藏菩薩」は菰(こも)に包まれて私の手元に届きました。私は冬の旅から帰った後、風邪を引き床に就いていたのです。私は枕辺にそれを置いてもらいました。眺め入るや私は病苦をも忘れて、またも微笑みに誘われたのです。(誰がその微笑みに逆らうことができるでしょう!) 再びその不思議な仏は私の心を全く捕えました。私はそれに見入り見入り見入りしました。・・・その日発願(ほつがん)し私は上人の研究に入ることを決心しました。

【出典】

柳宗悦『民芸四十年』岩波文庫「木喰上人発見の縁起」から抜粋し、一部字体を改め、ふりがなをほどこした。

民芸運動を起こし、民衆の間に培われてきた工芸美の世界にふみこみ、それに美的基礎付けを与えた人物が柳宗悦(やなぎむねよし 1889 - 1961)です。彼は1924(大正13)年甲府の小宮山清三氏宅で木喰仏との運命的な出会いをしました。微笑みをたたえたその仏像との対面が、後の運動の基礎になったとも言われています。その出会いと、木喰仏を実際に見た感想についてまとめ、その魅力について考えてみましょう。



眼の前に展示されているのが、身延町丸畑の四国堂に安置された木喰仏の最初の一体である弘法大師像です。宗悦の感想を参考にして、またワークシートの裏面の「日本民芸館」に展示されている地藏菩薩像も見比べて、この木喰仏についての印象や感想をまとめてみましょう。



「地藏菩薩像」日本民藝館

木喰仏との出会いを記した文章にも登場する浅川巧によって、柳宗悦は既に李朝時代の朝鮮の無名の職人たちの作った日用雑器の「美」について目を開かされていました。そして後の「民芸運動」を考える時に大きな転機となったのが、大正13年正月の木喰仏との出会いだったのです。柳はそれからほぼ3年間をかけて全国を回って木喰五行という、民間にあって修行の旅をして各地をまわりながら仏像を作りつづけた人物の跡をたどりましました。また、その中で出会った様々な工芸品の美から民芸運動の発想を得ました。



柳宗悦(1889～1961)

「民芸品」とはどのようなものかについては柳宗悦は『工芸の道』(1928)の中で次のようにまとめています。

- ・工芸の美は健康の美である
- ・用の美が結ばれるものが工芸である
- ・器に見られる美は無心の美である
- ・工芸の美は伝統の美である。

「民芸品」と呼ばれる各地の物産をリストアップしてみましょう。



あなたの身の回りにある「民芸品」や各地の「民芸品」について調べてみましょう。(…生活の中で使われている伝統に根ざした様々な道具、使いよく用いられることで形が洗練され、美しさが宿るようになったもの。それが民芸品です)

自分で調べたことを記入する。

民芸品とは、陶器、漆器、染織、紙と紙加工品、ガラス、蔓、藁、木工、玩具など。たとえば、張り子の人形、こけし、だるま、けんだま、こま、凧。

【参考】

- ・木喰仏については下部町丸畑の「木喰の里微笑館」では更に多くの資料を見ることが出来ます。
- ・柳宗悦については日本民芸館のホームページで詳しく調べることも出来ます。ホームページのアドレスは、(<http://www.mingeikan.or.jp/home.html>)です。
- ・浅川巧についての資料館が北杜高根町生涯学習センター内に開設されていて、ここでは巧の兄の伯教についての資料も閲覧することが出来ます。浅川巧については、江宮隆之『白磁の人』(中央公論文庫)が出ています。

観覧日：かんらんび 年 月 日 学校 年 氏名：

もくじきぶつ

木喰仏と民芸運動の出会い

それは去年の正月九日のことでした。私は思いついたまま甲州への旅に出ました。一つは小宮山清三氏の所に朝鮮の陶磁器を見に行くためでした。一つは八ヶ岳や駒ヶ岳の冬の自然が見たく日野春あたりを散策したいのが望みでした。また甲州で郷土的作品を購いたいと欲していたのですこの旅に私を誘ってくれたのは私の畏友浅川巧君でした。小宮山氏とは初対面でした。しかるにその日偶然にも二体の上人の作が私の目に映ったのです。・・・二体の仏像は暗い庫(くら)の前に置かれてありました。(それは地藏菩薩と無量寿如来とでした)・・・私は即座に心を奪われました。その口元に漂う微笑は私を限りなく惹きつけました。尋常な作者ではない。異数な宗教的な体験がなくば、かかるものは刻みえない 私の直覚はそう断定せざるを得ませんでした。・・・その折私は始めて小宮山氏から「木喰上人」という名を聞かされました。そうして峡南の人だということが付け加えられました。思いがけない私の驚きに対して、小宮山氏も心を惹かれたと見えます。一体をお贈りしましょうと申し出られました。私はこの好誼(こうぎ)をどれだけ嬉しく感じましたことか。越えて十六日「地藏菩薩」は菰(こも)に包まれて私の手元に届きました。私は冬の旅から帰った後、風邪を引き床に就いていたのです。私は枕辺にそれを置いてもらいました。眺め入るや私は病苦をも忘れて、またも微笑みに誘われたのです。(誰がその微笑みに逆らうことが出来るでしょう!) 再びその不思議な仏は私の心を全く捕えました。私はそれに見入り見入り見入りました。・・・その日発願(ほつがん)し私は上人の研究に入ることを決心しました。

【出典】

柳宗悦『民芸四十年』岩波文庫「木喰上人発見の縁起」から抜粋し、一部字体を改め、ふりがなをほどこした。

民芸運動を起こし、民衆の間に培われてきた工芸美の世界にふみこみ、それに美的基礎付けを与えた人物が柳宗悦(やなぎむねよし 1889 - 1961)です。彼は1924(大正13)年甲府の小宮山清三氏宅で木喰仏との運命的な出会いをしました。微笑みをたたえたその仏像との対面が、後の運動の基礎になったとも言われています。その出会いと、木喰仏を実際に見た感想についてまとめ、その魅力について考えてみましょう。



眼の前に展示されているのが、身延町丸畑の四国堂に安置された木喰仏の最初の一体である弘法大師像です。宗悦の感想を参考にして、またワークシートの裏面の「日本民芸館」に展示されている地藏菩薩像も見比べて、この木喰仏についての印象や感想をまとめてみましょう。

全体的に丸みをおびていて、表情が柔和。

地藏菩薩像も弘法大師像もよく似ている。 など。